諸國言

物類稱呼

衣
畐
飲食

四

W52－5
Ko 85
4

~~22702~~
22709

器用

注連 屋臺

たゝめ○祀前の長濱にて。がんだう○東國そ。やたい○なだいとゝ云大坂及泰山そ。だんぢり○かぶる勢ひ○ぢ方にて云又だしとも云又物まつり○祇園祭の鉾のごとき物を祇園會の形を制て方言又ねぶ—又神輿ともいふ

紙手

かうぞ○紙にて。こうぢ○紙にて。こうぢとゝ今按にこうぞとゝ大坂及泉州邊にてハ幸ごと云幸ごとハ上に見えたり

いなこ○を○家内○て○ごけたちを○せんざこと云て○せんざ○ハ篠の竹を○てのごとく○て○ちぢ○て○ごとく○て○ちぢ○て○ごとく○て○ちぢ○て○

篠葉山子

かざ　まづ　きち　　ちをづ

山田る俗称の事そかの一名秋景めれハ冬人まるの今梅よかせまて○もでき

やうにおもふ又備本ハ湯川寺の玄賓(げんひん)僧都の故事又俗称ハ

の海ハ哥書の注解 雑事 文類聚 にハ弾(だん)劾其制異(こと)なる 玄賓 和字正濫 等の諸説考合(あハ)て分辨(わけ)

るハ又ふくにて其形(ありさま)容(かた)ち数多(あまた)ありといへとも事繁(しげ)きゆへ爰に略と

機の具○ハ哥ありて○ちきり寒(さむ)きとき○をまきといふ

なり

まくらきぬまきぬと○ハきぬまきぬまくらきぬまきぬと○ハきぬまきぬまくらきぬまきぬと○ハきぬまきぬま

下級にて。あやいとをおさにて。あぜいとゝ云
あぜ竹　杼をとる竹なり　○実をそくさ　綜をとる竹なり　○実をそのくさと云
志らとゝ
ひ　校同　筴　○今按に二条ともにおさの色称ら青にい按をなづるまんなるべし
芝詮のうつまきをとりを俗称ざくらい又李白が烏夜啼詩に機中織錦秦川
女碧紗如レ烟隔レ窓語レ停レ梭悵然憶二遠人一ゝ云ふも似たり又世俗
和て閑のおもざる人を記をとるとき後を是ハ杼と筴とを是れあつて
ひとつ和におのおのにたよくするなる云
わすあめ　○京た坂そ。ちんまたさるはまそ。けいまた又。志のまた
○へちま又。志のまた尾張にて。あめ越ほそ。志の武蔵そ。



柊楑　釿　鋸　算盤　杠秤　銭

及安房上総常陸まで。又祢ぎどもの出る後は
さいづち〇来円そ。だんぎつちも及ぼさそ。さいづち
〇さいづちとも又鉄槌(なつち)を東尺まそ。かなさいづちとも
てをの〇裏ありそ。ちりんのとも
のこぎり〇来円又山陽九州にて。のこぎりとも
にて。のぎりとも又のこぎりとひ。名の物
ろろぐん〇薩摩にて。ろくろとも
ぢに〇来円そ表の方を。ぢと云。東国そ。かとも
来円そ。ぬめとも東国にて。なめと又鉄鎚の事を
らぬきとも出雲のもの尾張

椀

膳

もゆるびなどん伊勢そ
い　　　

今年にこさと云事、早駿の[illegible]に[illegible]べし

續日本紀に御器膳と又ごやうごさと云くるハ別ものなるべし

ぎ[illegible]ハ今の按の制とおぼえ今の世に按とふ

地[illegible]いふ[illegible]又かごいとふ

義仲精進がりしの詞あり

塩嚢抄にもとづく

職人盡哥合[illegible]いるがしなどの詞あり

平家物語に本る

[illegible]橋の[illegible]や今も年の初に門松につくる葉令よふ

[illegible]の[illegible]回のやうにて今ハ俗語連哥せしと

[illegible]物[illegible]ハ

[illegible]も[illegible]季吟

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

猪口　ちよく〇薄及そ。のぞく

盆　うつくしきをいふ。又食器をも指ハ飯食を盛俗に指ともいふ

且板　まな〇中まゐて。ぼにとらん〇俗に福建及朝鮮の方言に同

摺鉢　すり〇擂盆　同三戸まそ。らいぼん　哥に紫をらに紫苑を

みそ　ぬ〇擂盆　同三戸まそ。らいぼん　ふるにそもて

及腐　ふ〇擂盆　同三戸まそ。らいぼん　ふるにそもて

すりこぎ○江戸にて○そうじ又家内及所帯をおぼえ
はじめて○めぐり又まわりぎともいふ○めぐりこぎ
ひきうすの○○をきうき江戸大坂共に○おもに小陸及関東
ほかの形ちがひて○ひきうすのうちにて碁石の像の
ごとくなるを上下にわかちて○下を臼といひ○上を
目といふ○目の中ほどに○穴ありて○ここより
もの○○を入るるなり○目の上に○手をかけて
まわすなり○○ひきうすのうちにて○ひきうすの
ごとくなるを○○といふ○○は炭鉤(すみかぎ)なり

合類節用に十玉八冥官(えんのう)の像の



遍(テイク)火



炭鉤

釜

煙盒



なべ〳〵安房のまの浦黒にかるもしほたれてそでをもつゞけるや何方からも
なべ〳〵○江戸にて○くちなべとゝふもあり二路上人住給ひし旧跡とて今もあり
和泉国堺の南に一路菴といふ二路上人住給ひし旧跡とて今もあり
上人八一体称阿時の像と世に在せし一体は菴室に安置し多くいふ
路と言ふに萬事皆体をへいふ

鍋

杓

茶碗

へらひとこと茶庵のもてなし

季財なり一服献ひとつ

金五百疋をふ 通用くん

林七百疋をもちひて菜穀（さいこく）菜瓜（べいこう）のたぐひを施

長徳

てどうめよをのれがにのさ一首の哥あり

○かゞのうちと廣尾まで○かぎとよ

○ひさごのうちをもてつゝまぬ○ひさごとよ

○ひさごのうちをもてつゝまぬ○ひさごとよ

ご狩てひやくとなりとも

民八隣家へ行ふた茶碗を袖に懸

金五百疋をふ 通用くん

林七百疋をもちひて菜穀（さいこく）菜瓜（べいこう）のたぐひを施

てどうめよをのれがにのさ一首の哥あり

○かゞのうちと廣尾まで○かぎとよ

○ひさごのうちをもてつゝまぬ○ひさごとよ

○ひさごのうちをもてつゝまぬ○ひさごとよ

ご狩てひやくとなりとも

民八隣家へ行ふた茶碗を袖に懸

いづれ
にごらざるものべ○京にて○ろうごらざるものを
牡蠣稱呼
にいづれにごらざるものべ俗にろうがうをもて
たゞしろくハかろの高とよべ又かうろくハかろの高を
東雅 下學集 をもて焙炉(ほいろ)の字(よし)にかいろハ火炉(ほいろ)
なりとも夫をもて父の高とよべるとろうがうハ
とりて今の制とハ形ちうるはしからざる物
制ふ物なり

古の客亭には
牡蠣稱呼
古の客亭にハ牡蠣を
古の客亭にハ牡蠣を○てごうと云
物ろうハかたまりて口能をもちやびんと云形ちもつたる
ものを又ほびんとよびたるものとぞ又ほびんと

玉飛

どびん○筆洗ともそ○ちよう〳〵ハ
もと孤洲ゟ同出ちよう村そこれ
ちよう〳〵ハ球ふの地名なるもこゝの人海あにまりこゝち
ゟ嘸ふまきもの○ちよう〳〵ハ又常陸及ひもつ
ゟ翠九のたぐひにてハどびんなどにつくる八牛馬の毳(さん)
大イなるをいふなるべし武蔵の国まてまのたぐひ
ゟ濁(にごり)よふ水地のもの一につくる物を明(ぼう)ぶらと又どびんなど
てらちんの○化曇にて○ひぶくろの常陸まて○とつ
日向まてへことなり

行灯

あんどんの○かたにて○ちんどうともよ○ハ
まて○まんちやんどんとも云○ちんどんとハ
ぞんの誤(あやまり)小堀を兄(あに)度の物数(ものかず)にて制(こしら)へたる
ゟ輪(わ)を作(つく)りたるものをいふ

にぬりたるを油をすてて紙をもて拭ひ乾(ほし)てうつぶせなどにかくれば
○久しくもちなんどゝいへり越前にては油をすてゝ拭ふことなし
○縦(たとへ)ば芭蕉(ばせを)の文を○ふみ紫苑(しをん)の○灯心を○ともし○つかうまつる式(のり)などの
かゝる○手本(てほん)を○ほどこしたるをいふ○さんとくとも云○
さゝえ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

衣架

なかけ

のかくるひもとでさげつけだけ俗掛○土砂にて○こゝをざかと云

○衣桁ともかけともいふ○衣をかけおく棚なり

杜甫カ詩 翡翠鳴衣桁

歩障

つゐたて○そのそばをざかと云

剃刀

かみそり

○髭をそる手なり

柿

○犯にてつきそめたる女の男の刀のおなじものをつゐそめにかくるに用ゐる

○柿衣の及古衣にて○たいまつのくろきをぬぐふにも用ゐる

梯

はしご

○高きに登るに用ゐる

つとる〳〵○家内そ○つとる〳〵東国
本国地方にて○つとる〳〵○つとる〳〵
ふんのあく（小ろうを捕）○ふんのまにて○てん
たつべ（魚を奥し）○そのふんぞ○そのふんぞ
ごうけ（汁）魚喜よやいつぶん今八細ちぢそ
ふんぎやう○ふんぎやうと豊好
ふんぎやうと○ふんぎやうと○ふんぎやうと
ふんぎやうと○ふんぎやうと○ふんぎやうと
ふんぎやうと○ふんぎやうと○ふんぎやうと

又ゑそつくり人形といふ物をこしらへてかぶりて
ふるまふ事もあり又ゑそつくりといふ物を
ふくべにてこしらへてかぶりてをどるもあり
いづれもこの類なるべし
○紙鳶　いかのぼりの事なり
引ぬきといふ事なり
とりつけたる紙鳶をあげ
たるまゝにて糸をきりはなつ事也
○穀匝　こめびつ
其国にて
こめびつといふ
○東国にて
こめびつといふ
○からとさ大坂及讃岐にて
○げんぐるま
○揃　ちをけ
○上下総及武蔵にて
常陸にて
○ひだる
○江戸にて
猪牙船
○猪牙　ちやうちんをつけ
たる小舟
○江戸にて
猪牙船
○猪牙　ちやうちんをつけ
たる小舟
○江戸にて
○猪牙　ちやうちんをつけ
たる小舟

盥 輸 畚 苞

これらの
又たごとく
桶しるき
桶ともいふ
にては○
かなだらひ
たらひ○
はんざ
○奥州南部にて。たゞ
つの角のある
とうふ

○京にて。かづら エ匠をけ
をけとそ 奥州にて。及九州にて。
○西にて。かまけ 向さがかけ
さがやとうふ
まそ 俗に○西にて。たがとうふ
つと○ 西にて。すが

多識二 衣にて○かくてをけ又○さるがうへ○
笊にても用ゆるかごとそ
それのを犯家にて○たゞ
ともいふ
○奥にて○ほんそくだ
○ほんざらとも云 周備にて
○西にて。又角のざらとうふ
の耳だるに

○西にて。わとも云 田植のワク

木鉢

杵

梯

鮃

きぢ○江戸にて○きばち京にて○ひきぢも越なにて○きぢ

佐渡にて○出羽にて○うちぎとよ

きぢ○東國にて○てぎ称とふ

にて○かたちぎねとも　かちハ搗く搥ぐ等の字也

きぢといふ　婚礼に男ゟ杵を新婦の家へ　もやうを彩て画くこと也

はてご○伊勢の長島にて○ちうぎともいふ又○ごともいふ

今按に東海道五十三次の内に桑名の海を言倭名抄格別に改り

山谷カ詩　鬼門關外莫道遠五十三驛是

○ちぢらくのとらふぐを京及大阪にて○江戸にて云○ふぐ

○ちぢるとも又江戸にて云○やるとも又江戸にて云○河豚を喰ひ人の死るを忌時ハもを云をやう

とつくる人名ー　柳樽の略語
きぢやうごなるへー
にいふ　雨を蓑にうつ〇上野にて〇ぶんぶ
同名　夏ふる
あ　竹蓋
つくるあ〳〵竹蓋に
ざうりんまる
にそ〇こんがう草履を〇江戸にて〇なるぬきざ
のうら
ざうりを〇江戸にて〇こんがう
のうらなし
ざうりを〇江戸にて〇なるぬきざ
ざうりを〇江戸にて〇こんがう
ざうりを〇江戸にて〇こんがう
ざうりを〇江戸にて〇こんがう

地下にて明る八尾(いこま)の人もこえんがうまぶ昔比叡山安然(あんねん)尊師(そんし)
して書を求る方なりようて金剛(こんがう)杵器(しょき)をまに持る人
しようこんがうざうと世にいひなしこゝなり
かんざし(笄)閉そ。なんどらふ　そ挿にかざすハくゝ物そのほ
をたゞめて輪となし縄あみ草の紋をつけたるを戸なと
北越及奥羽にて苫(とま)をさゝかざしを指ひ対て
ふに用る家閉そだんどらふハ泥田の泥のよをふものにて
和行脚集に

「おもひ山さくらく下駄(げた)なくがきの乃をつくること

太平記(たいへいき)曰(いはく)かきを磐(いは)ぐる奴(やつ)ども

楽(らく)攅(さん)とるこゝろ山とを約の奥(おく)

吉野(よしの)れて落る時ハ山人(やまびと)桜(さくら)ハ又泥を泥(どろ)を約(やく)

て跡(あと)くらぶに塔(とう)

の葉で八重ねこしらへ、其辺をよくたゝきやはらかにしたるを、極のはなをに鼠緒こしらへ、八枚の重ね八ひらぶち八掲ひとさし、又○雪車こしらへ、其おもてを紙のやうにうすくけづりて、和漢雑書のやうにこしらへ、

會津風土記ニ雪車又作雪舟共訓素屐ト云、

くさやう○江戸及び京にて○はけをくといふ東国そ○ろくごうそでうこをはそ○くつ越前そ○くつをはにろくぎやうの祝ひ

○牛蒡の精

の葉で八重ねこしらへ、其辺をよくたゝきやはらかにしたるを、極のはなをに鼠緒こしらへ、八枚の重ね八ひらぶち八掲ひとさし、又○雪車こしらへ、其おもてを紙のやうにうすくけづりて、和漢雑書のやうにこしらへ、

堀川治郎百首

○牛蒡の精

衣食

さいふ○甲州及上野上総をはじめて陳ぢをえづけものといひつゝよ
きんちやく○ふくろにて○ものをいるゝ
はおり○妾房ぬにて○そでごろもの阿波ちぢみ○ぞ
姓氏と錦織(にしごり)とよめり羽織をそでごろもへふもおなじ
袴(はかま)とゝもかくもいふ道服(どうふく)ごろも
袴は古人も制法をさだめ給ひしかど又旅服中に便(たより)
よきぶくろとも
強盗(がうとう)ぬにて(ごうだう)ぞ
○信濃国布引の滝のてんぺんぶくろとも
○奥及南部の紺(こん)づきん又○がん
○紺づきんとゝ
○ゲーブルをゝび

腰帶

繻半

づきこてんこと武良我後父まて○ちゝのへ
こてんをび○東ほまて○こゝをびとて
沼ゑんがりこと云地を考へて○かくそ
こさんにてゝよはらぼうしゝ泉及黒
ちゞもゝにをゝ
みて○そぶつけともゝ盛中にてうそぶこと
とゝふ　今按にてゝら夏の日寒民の業をつとむるよ
丈ケそぶかく紙ハあゝなにそひらくと
紀の路ゝる地又どてゝらと浮地とゝ
名ハのべにをゝる地てゝらそひどゝ又つゞれるどゝ
及ち作て○ちんことゝゝ

萬葉集の哥に

ふどし
にて。○東國にて○うんどー
○まうつとう上略して○衣
わらせころたんさきにもるつとう
れいつよの川にひとそかくれ
説よふこそ和字正濫ニ
日本紀 貙皐褌 萬葉集ニ
又相撲を事となしてらん
の女の前に
二布 ふたの
換とつさぐ裏
衣にて○さ
びゆゑぐとう和名にて○ゆのもの
とう底
○奥州にて○よろづうとう

（和名）○ぼろ　あまのぼろ　和名○ぼろそのぼろ　ぼろんだ　和名○ぼろそのぼろ　ぼろんだ　紀ほそのぼろ　ぼろんだ　ぼろんだ　ぼろんだ

おごいかとらふ又古代の婚姻の儀式ハ女の
かの女のをふとそで又住吉のよハ飯を
をを
袁須袁勢なでふ人代るハ男子食の
うぶぶな
産和にを一掬とのかゆを飲ふる
こ
時麗おとをを変ハ宮ふこととて
下略
麗 和名 古之岐飯を施し
〳〵宮とるる又鷹に餌を
食〇米団そ。おこでも
ら
日本紀 等に
古事紀 一
女人をの時
ぶ
草 れ度の
なひへ
をする我をも
そらふ面ぶて
だ
午時半
まる
の向に食る者
くるハ午の
ふ
ハ移を労とる事えれはう条が
こ
ふ色飯
ふ
作のまて

○こひるまでよるもにぬるをいとひて夜会（よかい）を○ひるまでよるもにぬるをいとひて夜会（よかい）を○よべことさらに飯（いひ）をたきてうるをいとひて夜会（よかい）を○ことさらにといへ汁椀（しるわん）をとりあつめて

○世俗（よのつね）ますに赤豆粥（あづきがゆ）を煮（に）て○さくらづゐ○かつ賀（が）にて○但馬（たじま）にて○ざくろ○ぬるでなどを世俗（よのつね）ますに赤豆粥（あづきがゆ）を煮（に）て祝（いは）ふことあるは○伊豆（いづ）の國風（くにぶり）そこ記明神（きみやうじん）の氏子（うぢこ）保呂（ほろ）の里（さと）と云（いふ）ものゝ家（いへ）ごとに赤豆粥（あづきがゆ）を煮（に）て里（さと）人（びと）にふるまふ事（こと）なるよう今（いま）も正月十（しやうぐわつとを）日（か）小豆（あづき）

清少納言枕草子　三十（さんじふ）六（ろく）

狹衣（さごろも）

○ものゝ形（かたち）をつくりて女（をんな）の後（のち）をとりて○小國（こくに）及（および）

又今日河内より年貢の神社に下男ども門粥厳て十
小豆粥を煮て神供とし五穀成就の祈念ありて行を立
伐て餐ありまるを五十四年それを五穀及ろその種なもの名
多て次の中へ投ず。さて一人真黒をもりて粥餐の中に入
のか減を又そそくに何の種ハ十分何の種ハ少なと神を
よろこぶるの意近きの農民都ふかてそ下の吉凶を書有年
せて農事をつとむる事也それと年号のもと粥をひ下男ふ
粥を食ぜ度ごとに用ふ小粥祝通言ゆなりとで又ちふて
種をふり並て大日の取れを合をろの麻
の汤をト事をそを則十八日粥とふ

十金月令

荊楚歳時記の説

ざくと云ふ○河内及播磨にては○びやうたれと云か賀茂雑炊ともいふ○ふまぜと云伊勢にて○ゐれめしと云東ほまでづくと云ている○おじやといふ京都にて正月七日の朝の菜の油揚を細かくきざみ入るを福ぢからいふ○つくわりと云大坂及堺にて○神棚に備る雑煮にて八俗よりふ雑のこと云てゐがきとハ俗よりふ雑のこと云てゐがきとハ正月七日の朝の菜を集めて粥に炊て食ふこれを福ぢからいふ○つくわりと云大坂及堺にて○神棚に備る雑煮にて八俗よりふ雑のこと云てゐがきとハ正月七日の朝の菜を集めて粥に炊て食ふこれを福ぢからいふ

雜煮

○按雜煮　俗にいろくの菜煮をまぜ食ふをいふ　和名もちひ○妄按ずるに八小児に對て雜煮と云又はじめに食ふ物をも雜煮とも云なるべし　或問云

雜炊

たゞ一かなるつゝを拂ひむ掃のかとくの名粥なく犬の糞八ぬたくりと本由う消さう事ふ由亮陽律師

かんとも云ひ又おんとも云ひて八坂にて新京市井我
とうんぐ〜と云ふ妻におくれて一下廓を掃へ住居を此
高くなりうあつものと例で○ぜんざいもち赤沢
入て○おんざいのもち云 神在餅と云
書ようし
なり将軍御成の時は必ず此餅をうけて給
そ○おんざいとは神在煮又善哉煮なり
ふぐ〜鉄砲国の通称へ多くふぐ
いふ今又物を云ひごまかすを
へぎりちりとふ
ふくでんを云越後及仙波そ
為づけて。志ら倹とよある人のもとにて
かくれ笔の歯よ八ヶ及ぶ〜とも
ふ〜ありそ

餅のもと後の菓子
餅のもと後の菓子

餅のもと後の菓子

餅のもと後の菓子

又下汲の團子ハ糯米(もちこめ)を焼(やき)て炭(すみ)ら[illegible]に小麦の粉を上下(うへした)に塗(ぬり)て極(ごく)の熱湯(あつゆ)を[illegible]ふらふらの[illegible]に捏(こね)るも[illegible]ふらふらの[illegible]に捏(こね)るも[illegible]ふらふらの[illegible]に捏(こね)るも

煎餅　白雪糕　滑飴　糒米　炒

菜漬

だいこんを煮て東にて。かくあんづけとう

今按に武州品川東海寺開山澤庵禅師

制一初めて漬て沢庵漬と称とこのひつふ(ぶ)貯(たくわ)へ漬とう後

又彼寺まで沢庵漬と唱ふ是又沢庵和尚

「おもふ」の真字おうと記ケ

烏丸光廣卿れ烏添書に納もの俗正月の頃にあふぎと又祝ふ俗

「まくひ」にめつらしれ物もの心祝ふ

酒

さけ○出羽まて。いさゝと云ふ和名大麻なり○ごまのこいとゝ

いさゝ(ふ)ら出羽州羽黒山などの行者の隠体(ふるまい)を能人もそれ

つゞく

勿頁毎平曰

つゞく

物類稱呼 卷四

匠の用水（ひけみづ）といふ今はかぎりて

の掘り初（そめ）し東園（そのゝ）をせんぼくと云

の新しい馬士竹奥舁（まごたけおくかき）などまでそれ

とこゝハ炎酒（ほてさけ）を賣（きら）るゝ酒屋を

つゝみ酒を兎ころとゝめびの毬（まり）を

て兎ごのことゝいふ又後河（あとがは）の

物類稱呼 卷四

~~22312~~

22709

国立国語研究所
1001089869